

《平成26年度 防災講演会報告書》

日時 平成26年9月28日（日）午前10：30～

場所 御前崎市民会館ホール

講師 秋富慎司氏 岩手医科大学 岩手県高度救命救急センター 助教

演題 岩手県災害対策本部医療班の苦悩—東日本大震災から学ぶ—

来場者数 199名（女性のための防災・減災リーダー養成講座受講生含む）

内容 震災発生時から内閣危機管理センター、DMAT（災害派遣医療チーム）事務局等への連絡不能。「天候も悪く救助へ向かいたくても手段も人もいなかった」から始まり情報が無いのが情報であり情報のトリアージの必要性。福知山脱線事故を経験し災害現場での治療の難しさからアメリカに渡り特別救助隊の教育を受けサーチアンドレスキュー（検索をして救助する）を身につけた。

宮城岩手内陸地震の経験などからP（活動の目的と内容の明確化）A（事故概要、現在の活動状況、見込み負傷者、応援要請の判断等）C（現場指揮本部の有無、場所、責任者、連携する組織、報連相等）S（バックアップ体制の確立）重要性。

災害現場の3C【①指揮命令系統（縦）②他機関連携（横）③情報網の確立】の重要性。

災害現場での注意事項として4S【①自分自身（Self）②スタッフの安全を含むその場（Scene）③傷病者（Survivor）④地域社会（Society）】自分やスタッフが守れなければ傷病者は守れない。自分が混乱してしまえば安全確保ができず守れないことを肝に命じる。

時間ごとに何をすべきか「10n」乗っていく1時間、10時間、100時間、1000時間、10000時間それぞれやるべきことが整理されていなければならない。

効果 来場者のアンケートで先ず多かった感想は普通の医師が災害現場で危険を承知で治療していることに驚いていた。3Cは自主防災会だけでなく一般社会にも役立てることができるなど情報の整理をしつつ多方面との連携の必要性や2重、3重のバックアップ体制が必要不可欠だと感じたようだ。

災害時には〇〇さんに伝えたから大丈夫ではなく〇〇に伝えたけどダメな時を予測して△△さんにも伝え、フィードバックすることも重要な対策だと改めて認識できたことは今後の防災対策や減災活動に役立てられる講演会でした。



以上

報告者 NPO法人御前崎災害支援災害支援ネットワーク 落合美恵子